

ムスタン紀行　ローマンタン出發

仲　紀久郎

平成廿六年八月七日

午前六時朝食。愈々ローマンタンに別れを告げ歸路に著く。復路も往路に劣らぬ險しき行程なれど、戻るのみなれば餘裕を持ちて臨む。ローマンタンの菜の花と蕎麥の花、これが見納めなり。

既にジープを二度乗換へたり。崖崩れ箇所にて約一時間半歩くに今回は下り坂の多ければ脚も軽し。往路にては限りなく續くやと思ひにける川沿ひの道も、復路は雑談しつつ通れり。

一つ目の吊橋の邊りにて、太陽、大いなる傘に圍まれてあり。太陽を中心に巨大なる同心圓、空一杯に擴がれり。雲は無く快晴なり。雨の兆しも無し。

ポーター氏達、川の中にて何事か始めたり。「アンモナイトりや」と同行者の言ふ。この邊り、海拔三千米を越ゆる高地なるも曾ては海底にて、今も太古の貝の化石出土す。特に河川附近にては侵蝕作用にて見出し易かるべし。

次なる吊橋に至る小徑は、住民のみの通る迷路の如し。人家の裏を通り溝を跨ぎ犬に吠えられ、迷ひつつも橋に辿り著けり。吊橋を渡れば小さき茶店あり。ジープ到着を待つ間に晝食を攝ることとす。食事済み更に小一時間、ジープやうやく到着。されど、四臺來る苦なるも二臺のみなれば、ジープの後部に積むべき荷物は總て車の屋根上に縛り附け、空きたる場所に席を作りて補助椅子とす。ベンチシートなれば、ここに可能な限り坐るなり。我等十七人とポーター氏達四人、更に運轉手二人の計廿三人鮎詰となりぬ。仲の良き中年夫婦有り。小柄なる御主人、奥方の膝の上に坐りけり。

夕刻ジヨムソンに到着。休憩の後、一週間ぶりのアルコールにて乾杯す。デンマークのツボルグ麥酒なり。

ポーター氏達への感謝會を催す。返禮に當地の林檎ブランデーを戴く。味と香りはブランデーなるも、無色透明にて水の如くに見えにけり。

(平成二十七年七月十四日受附)